

ICU在学生の人生観の調査研究

— 20年前との比較 —

岩崎 正子

石塚 正一

原 一雄

はしがき

第2次世界大戦の痛みを契機に、真理の追求と自由の高揚とをめざして1953年に創立された国際基督教大学（以下、ICU）は、今年で30年目を迎えた。その間、日本社会における政治的・経済的・文化的な変容を背景に、又、学園紛争など本学の特殊な経験を通して、学生自体の価値観も変化してきたのではなかろうか。

ICUでは、1961年から数年間に渡って、価値観に関する研究が行われたが、今回はその時に得られた資料と新たに集められた20年後の今日のICU生の価値観とを比較して、その変容を見ようと試みた。

心理学においては、1930年代から行動科学的アプローチの一つとして、価値観を教量化する試みが見られた。この価値観測定の研究に大きな貢献をなしたのものとしては、Vernon-Allport（1931）の価値志向尺度、カルフォルニア大学の権威主義尺度（Fスケール）（1950）、Morris（1956）及びKilby（1963）の価値尺度を用いた研究などがあげられる。

本研究では、価値観のうち、特に人生観について取り上げる。ここで取り扱う人生観、すなわち「生き方」とは、個人が意識しているとは否とに関らず、日々の生活において決断を下す際の基準となる態度であり、時代や社会情勢の変化に伴って、個人の内部における自律的希求として、また集団の規範として、徐々に変化するものと考えられる。

I. 目的

現在のICU在学生の人生観が、20年前に在学していた同年令の学生集団に比べて、果して大きく変化しているか否か、また、変化しているとすれば、どのように変わってきたかを調べる。その際、男女別に比較して、人生観に違いがあるか、また信じている宗教によって人生観は影響を受けるかどうかをも調べる。また、アメリカの大学から得られた資料と比較することによって、時代的変遷と本学の特徴について考察を進めることとする。

II. 方法

1. 調査対象 1983年度ICU在学生360名を調査対象とし、1963年度ICU在学生421名の資料と比較した。それぞれの内訳は表1のとおりである。

表1 回答者の内訳

		1963			1983					
		Fr.	So.	Total	Fr.	So.	Jr.	Sr.		Total
性	男	129	95	224	62	26	21	13	0	122
	女	122	75	197	118	30	35	49	0	232
	不明	0	0	0	0	0	0	0	6	6
宗教	基督教				22	4			0	26
	仏教				16	0			0	16
	神道				2	0			0	2
	その他				0	1			0	1
	無宗教				93	50			0	143
	無回答				48	1			123	172
学科	人文	58	36	94	28	8	12	8	0	56
	社会	112	92	204	42	21	8	16	0	87
	理	36	20	56	23	11	1	1	0	36
	語	45	18	63	58	11	16	22	0	107
	教育	0	1	1	30	4	18	14	0	66
	不明	0	3	3	0	1	1	1	5	8
合計		51	170	421	181	56	56	62	5	360

また、Morris (1956, 1971) の資料を日米間の比較に用いた。

2. 調査用紙 Morris, C. (1956) によって作成された「13の生き方」の日本語版を使用した。(付録参照) これは、思想史上の主要な人生哲学の内容を分析し、比較検討した結果導き出された13の代表的な人生に対する価値志向を示すものであり、各々の生き方は約100語の文から構成されている。表2には、その「生き方」の要旨を表示した。被調査者には、それぞれの生き方に対して抱く個人の好ましさの程度により、1(絶対に好ましくない)から7(絶対に好ましい)までの7段階の評定を求め、また、各々の生き方に対して、1位から13位までの順位を付けさせた。

表2 各生き方の要旨

生き方	(名 稱)	概 要
1	(中庸型)	人間の達成せる最上のものの理解保存, 規律と叡智の人生
2	(達観型)	人や物に依存せず, 自己を原点とする内省, 自足の人生
3	(慈愛型)	他者への愛情と共感, 自己主張の抑制の人生
4	(享楽型)	ディオニソス的人生, 生の感覚的享楽と孤独の共存
5	(協同型)	集団活動への参加, 他者との協調, 積極と行動の人生
6	(努力型)	停滞や安楽を嫌い, 変革に志向せる不断の活動
7	(多彩型)	時と場合に即応する柔軟性, 一定の生き方に偏らぬ多元主義
8	(安楽型)	強烈な刺激は嫌うが, 平穩の中で快樂追求
9	(受容型)	自然に逆らわぬ老荘的人生
10	(克己型)	衝動は抑え, 克己と理想と自立のストイックな人生
11	(瞑想型)	外界からの離脱, 瞑想の内的生活の充実
12	(行動型)	外面生活の尊重, 冒険的でエネルギッシュな人生
13	(奉仕型)	人のため, 世のための献身, 宇宙的目的への献身

Ⅲ 結果と考察

1. ICU生の人生観の20年前との比較

1963年度と1983年度ICU在学生から得られた各生き方の好ましさの平均評定得点を図1に示した。評定得点4を好ましさの中位点と、5, 6, 7

を高い評価, 3, 2, 1を低い評価とした尺度上に各生き方の平均値が示され, 各生き方ごとに2群の平均値を結ぶことによって, 20年間の変化を表わしている。

さらに, これら2群のそれぞれの生き方を, 評定得点によって高低2群に分け, χ^2 検定 ($df=1$) を行なった。その結果が表3である。2群間で有意な差の見られた生き方は7つあり, 1983年度に評価の上昇した生き方は,

表3 χ^2 検定による1963年度
と1983年度のICU学生
の比較

生き方	χ^2	P
1 中庸型	.917	
2 達観型	.406	
3 慈愛型	1.773	
4 享楽型	13.939	<.01
5 協同型	16.007	<.01
6 努力型	35.762	<.01
7 多彩型	29.269	<.01
8 安楽型	8.658	<.01
9 受容型	2.562	
10 克己型	19.716	<.01
11 瞑想型	2.535	
12 行動型	.001	
13 奉仕型	11.763	<.01

“享楽型”(W4), “多彩型”(W7), “安楽型”(W8)の3つ, 一方, 下降した生き方は, “協同型”(W5), “努力型”(W6), “克己型”(W10), “奉仕型”(W13)の4つであった。図1を見ると, 最も好まれているのは, “多彩型”(W7)や“慈愛型”(W3)で, 最も嫌われているのは, “瞑想型”(W11)や“受容型”(W9)である。これらの生き方の評価は, 20年前と比べてほとんど変化していない。特に, W7は, 最高の評価を受けながら, 20年前よりもさらに一層その評価を高くしている。

この図1を見ると, 行動と思索と楽しみに柔軟性をもたせる“多彩型”や, 他人への愛と思いやりを重んじる“慈愛型”が好まれ, 内的生活に生きる“瞑想型”や物事があるがままに受け取る“受容型”が嫌われていることから, ICU生は20年前も今も, 消極的で外界から離脱した生き方を嫌い, 多彩で人への思いやりも忘れないバランスのとれた生き方を好んでいることがわかる。特に, 他の生き方とはかけ離れて高く評価されている“多彩型”を, ICU生の代表的な人生観とすることができる。ICU生の社会的評価の一

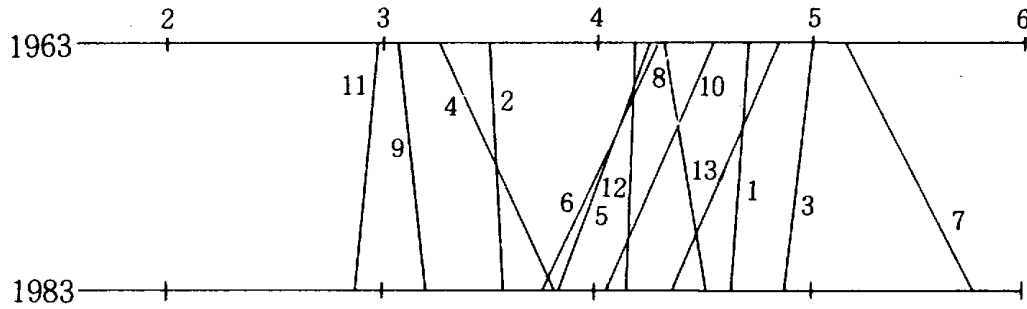


図1 評定得点の平均値の変化 (ICU, 1963 ~ 1983)

つは、何かに片寄らず、様々な事を柔軟にやりこなす生き方が現在の風潮に合っている、という点が指摘できるであろう。

そして、20年前に比べて“享楽型”と“安楽型”の評価を高く、“努力型”、“協同型”、“克己型”、“奉仕型”を低く評価していることから、現在のICU生は、他者との協調や奉仕を嫌い、自己の欲求を抑えてまでも目標に向かって努力するよりは、安易で快楽的な生き方を好ましい生き方と評価する傾向にある点が特徴づけられる。この特徴は、現代の青年の一般的傾向と合わせて考えなければなるまい。

2. ICU生における男女別比較

1963年及び1983年度のICU生において、男女の評定得点に差があるか否かを比較する為に、分散分析($df=1, 419$ および $1, 352$)を行なった結果が表4である。有意な差の見られる生き方について、男女のどちらが高くその生き方を評価しているかを、棄却率(P)の横に示した。結果は表4のように、1963年では“中庸型”(W1)、“慈愛型”(W3)、“努力型”(W6)、“多彩型”(W7)に有意な差が見られ、“努力型”以外は、女性の方が男性よりもそれらの生き方を高く評価している。1983年では“努力型”(W6)、“多彩型”(W7)、“行動型”(W12)に有意な差が見られ、これらの生き方の中で“多彩型”以外は、男性が高く評価していた。

表4から、1963年で男女間に差のあった“中庸型”と“慈愛型”は、1983年では差が見られなくなり、新たに“行動型”に差が見られるようになった。2群を通じて差が見られるのは、“努力型”と“多彩型”で、“努力型”は

表4 分散分析によるICU学生の男女別及び宗教別比較

生き方	男女別						宗教別		
	1963			1983			1983		
	F	P		F	P		F	P	
1 中庸型	6.445	.01	女>男	1.158	.28		.544	.58	
2 達観型	.446	.50		.015	.90		4.534	.01	仏>基
3 慈愛型	5.608	.01	女>男	2.443	.11		3.723	.02	基>仏
4 享楽型	.406	.52		.278	.59		2.751	.06	
5 協同型	.000	.99		.063	.80		4.195	.01	仏>無
6 努力型	5.665	.01	男>女	7.545	.00	男>女	.585	.55	
7 多彩型	4.879	.02	女>男	5.762	.01	女>男	.999	.37	
8 安楽型	.049	.82		1.861	.17		.301	.74	
9 受容型	.245	.62		.197	.65		.171	.84	
10 克己型	.800	.37		.204	.65		2.698	.07	
11 瞑想型	1.594	.20		.005	.94		2.737	.06	
12 行動型	3.283	.07		15.969	.00	男>女	1.669	.19	
13 奉仕型	2.651	.10		1.912	.16		8.776	.00	基>仏,無

男性が、「多彩型」は女性が高く評価している。

現在の男子学生は、停滞や安楽を嫌い、変革に志向する不断の活動を好む「努力型」や、冒険的でエネルギッシュな人生を好む「行動型」を女子学生よりも高く評価しており、より活動的な生き方を好む傾向がみられる。男女両方に最も高く評価されている「多彩型」は、女子学生に非常に好ましい理想的な生き方とされている。

3. ICU生における宗教別比較

宗教が異なることによって、各生き方の評定得点に差が見られるか否かを比較する為に、分散分析(df=2, 185)を行なった結果が表4である。基督教徒と、仏教および神道その他、ならびに無宗教の3群を比較した。どのグループ間で有意な差が見られるかは、Scheff法によって調べ、棄却率(P)

の横に記した。なお、1963年度在学生の宗教別の資料が無い為に、1983年度在学生の宗教別比較のみを行なう。

表4から、“達観型”(W2)、“慈愛型”(W3)、“協同型”(W5)、“奉仕型”(W13)において、有意な差が見られた。これらの各生き方において、3群間の差をみると、まず“達観型”は仏教徒の方が基督教徒よりも高く評価している。次に“慈愛型”は基督教徒の方が無宗教の者よりも高く評価している。“協同型”は、仏教徒が無宗教の者よりも高く評価しており、“奉仕型”は基督教徒が仏教と無宗教の者の両グループよりも高く評価している。

1983年度在学生による宗教別比較の結果をみると、仏教徒は“達観型”と“協同型”を、基督教徒は“慈愛型”と“奉仕型”を他の群よりも高く評価している。

もし学生が自分の信仰を忠実に実践しようとして試みているならば、“達観型”や“協同型”は仏教的な生き方に、“慈愛型”や“奉仕型”は基督教的な生き方に反映されていると言えるであろう。Morrisは“13の生き方”の質問紙を作成する前に、10通りの生き方を歴史上の主要な思想と結びつけて考えた。すなわち、次のW1からW10がそれである。W1は“アポローン神話と孔子の教え”，W2は“ブッダの教え”，W3は“キリストの教え”，W4は“ディオニソスの神話”，W5は“マホメットの教え”，W6は“プロメテウス神話とゾロアスター教”，W7は“マイトレーヤの思想”，W8は“エピクロースの教え”，W9は“老子・荘子の教え”，W10は“ストア派の教え”である。ここに得られた資料を見ると、やはり仏教徒は“ブッダの教え”に基づく第2の生き方を、基督教徒は“キリストの教え”に基づく第3の生き方を高く評価していた。

以上のことから、その個人がどのような宗教を信じているかによって、どのような生き方を好ましいものとするかが大きく影響されることが明らかになった。すなわち、学生はその信じている宗教の教え方に基づいて、生き方の好ましさを評価していると言えるのである。

4. ICU生とアメリカ人学生との人生観の比較

ICU生の特徴を浮き彫りにするために、1950年及び1970年にMorris, C. (1956, 1971) によってなされたアメリカ人学生の結果を図2に示した。図1と比較して明らかに異なる点は、“奉仕型”(W13)が、1950年と1970年共に、他の生き方と比べて著しく低く評価されている点と、“中庸型”(W1)が、この20年間に急激に低く評価されるようになった点である。

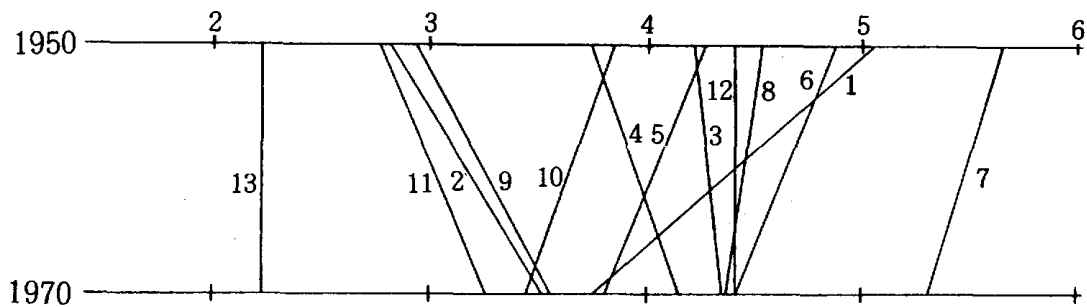


図2 評定得点の平均値の変化 (US, 1950～1970)

その他の点は、アメリカ人学生においても、“多彩型”(W7)が最も高く評価され、やや評定得点は上がったものの、“瞑想型”(W11)、“達観型”(W2)、“受容型”(W9)を比較的低く評価しているなど、ICU生の傾向と類似している。また、“克己型”(W10)、“努力型”(W6)、“協同型”(W5)の評価が下がり、“享楽型”(W4)の評価が上がっている傾向もICU生と似ている。

上記の“奉仕型”(W13)が低く評価されることについて、何故日本よりも基督教の普及しているアメリカにおいて、その教義内容に近いこの生き方が斯様に低く評価されるのか、疑問に思われる。しかしまた、人間の成し遂げた最良のものを理解し、保存していこうとする“中庸型”(W1)の評価も、急激に低下している。この2点を考え合わせると、現代のアメリカ人学生は、伝統的な生き方に反発しようとしている為に、このような評価をしたのではないだろうかと考えられる。

その他の傾向はICU生のものとよく類似していたが、50年代から70年代のアメリカ人学生の傾向と60年代から80年代のICU生の傾向に類似点が高いということは、何を意味するのであろうか。戦後、様々な面で、アメリカの文

化の影響を受け続けている日本において、そして特に、交流の密なICUにおいては、人生観を含めた学生の価値観自体が、アメリカの影響を強く受けている事を暗示している。

5. 因子分析による因子構造について

表5 1963年度及び1983年度の因子行列ICU

生き方	1963						1983					
	(N = 421)						(N = 360)					
	I	II	III	IV	V	h	I	II	III	IV	V	h ²
1	.265	.097	-.221	-.575	-.351	.583	.069	.031	.145	-.007	-.830	.715
2	-.294	.706	-.122	-.053	-.219	.651	-.440	.614	-.045	-.023	-.239	.630
3	.760	.076	-.120	-.166	-.132	.642	.808	.005	.066	-.054	-.096	.670
4	-.403	.360	.080	-.234	.417	.527	-.328	.130	.492	.103	.280	.456
5	.277	-.253	.591	.287	-.147	.595	.348	-.147	.114	.530	-.334	.548
6	-.193	-.014	.745	.016	-.288	.676	-.098	.019	-.041	.803	-.102	.667
7	-.033	-.150	.041	-.716	.066	.542	.048	-.039	.620	.098	-.272	.471
8	.119	.356	.048	-.654	.091	.579	.141	.111	.683	-.080	-.084	.513
9	.132	.624	-.016	-.316	.057	.510	.099	.688	.359	-.059	.021	.616
10	.120	.071	.119	.000	-.827	.717	.217	.409	-.497	.256	-.359	.656
11	.232	.709	.039	.250	.053	.623	.125	.805	-.070	-.010	.087	.676
12	-.063	.084	.732	.127	.222	.612	.054	-.003	-.002	.669	.393	.605
13	.854	.048	.028	-.047	-.055	.737	.844	.144	-.027	.114	-.026	.747
固有値	1.881	1.216	1.583	1.601	1.714		1.643	1.726	1.584	1.387	1.646	
寄与率	.235	.152	.198	.200	.214		.206	.216	.199	.173	.206	

1963年度及び1983年度のICU生の調査結果に基づき、相関行列を求め、Varimax法による直交回転を施した因子分析を行なった結果、表5に示されたように、それぞれの学年度につき5つの因子が抽出された。

2群の因子構造を比較すると、因子Iから因子IVまでは、非常に類似した負荷量を持つ因子であった。しかし、因子Vは、1963年度はW10が、1983年度はW1のみが、大きな因子負荷量を示す結果となった。

もし仮に各因子に名称をつけるとすれば、因子Ⅰは“慈愛奉仕型”，因子Ⅱは“内面生活型”，因子Ⅲは“積極的行動型”，因子Ⅳは“快樂的多彩主義型”と呼ぶことができ、因子Ⅴは、1963年度は“克己型”1983年度は“中庸型”と名付けるのが相応しいであろう。

このように1963年度及び1983年度に抽出された因子は、因子Ⅴ以外は等価の因子であり、20年前とほぼ等しい因子構造を示すものであった。

表6 因子構造の比較

因子	1963	1983	U. S. (1) Morris, C (1956)による資料
Ⅰ	W13, W3	W13, W3	Factor D W13, W9, W3
Ⅱ	W11, W2, W9	W11, W9, W2	Factor C W11, W2, W9, (-)W5
Ⅲ	W6, W12, W5	W6, W12, W5	Factor B W12, W5, W6, (-)W2
Ⅳ	(-)W7, W8, W1	W7, W8, W4, (-)W10	Factor E W8, W4, (-)W13, W10
Ⅴ	(-)W10	(-)W1	Factor A W1, W10, W3, (-)W4

この2群の各因子をMorris (1956)の結果と比較してみたのが表6である。まず、因子ⅠはMorrisの因子Dに対応しており、そこでは因子Dが“受容的協調同情関心型”と名づけられている。因子Ⅱは、因子Cと対応し、“内面的精神生活による自己満足型”と呼ばれ、因子Ⅲは、因子Bと対応して“社会的積極的行動型”と呼ばれている。因子Ⅳは、因子Eとほぼ対応していたが、Morrisの方では抽出されなかったW7が、ICUの2群それぞれから抽出されていた。ICU生では“安楽型”(W8)と密接に関連して“多彩型”が位置づけされている。ICUの2群にそれぞれ単独に表われた因子Ⅴは、共にMorrisの因子Aに包含されている。因子Aは“社会的抑制と自己抑制型”と名がつけられているが、ちょうど、1963年度の方に“自己抑制型”が表われ、1983年度の方に“社会的抑制型”が表われている。

以上の結果から、ICUで得られた2群の資料は、Morrisによって行なわれた因子分析の結果と極めてよく類似しており、20数年を経た異文化間においても、この5つの因子を、大学生が抱く人生観に対する価値意識の基本的因子と考えることができるということが改めて確認された。

IV. 結論

Morrisの「13の生き方」の調査用紙を邦訳し、現在のICU生の人生観が20年前に在学していた同年令の学生集団と比べて、いかに変容したかを調べた。

ICU生は、20年前も今も、行動と思索と楽しみのバランスのとれた生き方を最も好ましい生き方と評価し、消極的で外界から離脱した生き方を好ましくない生き方と評価していた。20年前と比べて変化した点は、他者との協調や奉仕を嫌い、自己の欲求を抑えてまでも目標に向かって努力するよりは、安楽的で享樂的な生き方を好ましい生き方とするようになったことである。この傾向は、アメリカ人学生の50年代から70年代の傾向とよく類似していた。

次に、ICU生を男女別に比較してみると、現在の男子学生は女子学生よりは「努力型」や「行動型」を高く評価しており、女子学生は「多彩型」を非常に好ましい生き方としていた。また、宗教別にみると、仏教徒は「達観型」と「協同型」を、基督教徒は「慈愛型」と「奉仕型」を他の群よりも高く評価しており、信じている宗教の教えが生き方の好ましさに影響を与えているものと思われる。

最後に、ICUの2群について因子分析を行なったところ、因子構造は極めて類似した結果となり、抽出された5つの因子はMorrisの結果とよく対応していることから、時代と文化の差を越えた大学生が抱く人生観に対する価値意識の基本的共通因子と考えられる。

参考文献

- Adorno, T.W., Frenkle-Brunswik, E., Levinson, D.J. & Sanford, R.N.,
1950, *The Authoritarian Personality*, New York :Harper.
- Kilby, R. W., 1963, Personal values of Indian and American university
students, *J. Hum. Psychol.*, 3, 108-145.
- Morris, C., 1956, *Varieties of Human Value*, Chicago Univ. Press.
- Morris,C. & L.Small, 1971, Changes in conceptions of the good life by
American college students from 1950 to 1970. *J. Per. Soc.
Psychol.*, 20 (2), 254-260
- Vernon, P.E. & Allport, G.W., 1931, *Study of Values*, Houghton.

**A STUDY ON THE ICU STUDENTS' VIEW OF LIFE
—A COMPARISON WITH STUDENTS IN 20 YEARS AGO—**

Masako Iwasaki
Masakazu Ishizuka
Kazuo Hara

PURPOSE:

The aim of this study was to investigate what changes have taken place in the values of the students of ICU during these 20 years. At ICU, a survey concerning the student's values had been conducted during the several years starting from 1961, and to compare with that data we tried to elucidate the values of today's ICU students. We have also determined to compare the 20 years change of ICU student's values with that of the student's in America, in which case the example was the change seen between 1950 and 1970.

METHOD:

Subjects were the ICU students of '63 and '83. Data referring to the American students of '50 and '70 have been adopted from Morris' study (1956, 1971). The Morris' Value Scale method (1956) was used in which 13 possible life styles are presented. The respondent is asked to answer how much he/she personally likes them respectively. The extent of his/her likes or dislikes are to be put in numbers; numbers 1 to 7 where 1 is the most disliked and 7, the most liked. The order in which the 13 life styles are preferred is also asked.

A brief content of the 13 ways of living are as follows:

- Way 1: To preserve the best that man has attained.
- Way 2: To cultivate independence of persons and things.
- Way 3: To show sympathetic concern for others.
- Way 4: To experience festivity and solitude in alternation.
- Way 5: To act and enjoy life through group participation.
- Way 6: To master changing conditions constantly.
- Way 7: To integrate action, enjoyment, and contemplation.
- Way 8: To live with wholesome, carefree enjoyment.
- Way 9: To wait in quiet receptivity.
- Way 10: To control the self stoically.
- Way 11: To meditate on the inner life.
- Way 12: To seek a chance for adventuresome deeds.
- Way 13: To obey the cosmic purposes.

RESULTS AND CONCLUSIONS:

Results from the Value Scale of ICU students in 1983 have proved to be similar to that of 1963 in the general tendencies. Twenty years have not changed the tendency of Way 3 and 7 to be liked mostly, and Way 9 and 11 to be disliked mostly. The preference for Way 7 especially has become more intensive.

From this, it could be considered that the ICU students prefer the life of the dynamic integration of enjoyment, action and contemplation, and also the life of the sympathetic concern for others. And they do not prefer such lives in quiet receptivity and meditation. These tendencies have not changed during the last 20 years.

On the other hand, minor differences have occurred during the same period, where the extents to which they prefer Way 4 and 8 have increased and that of Way 5, 6, 10 and 13 decreased.

This suggests that ICU students have become to like self contented enjoyments and comfortable lives for themselves, and to dislike contro-

ling the self stoically and being used by other persons. These preferences of life match well to the current tendency of this age group.

The changes occurred during the last 20 years from '63 to '83 at ICU have quite a resemblance to the results of 20 years change from '50 to '70 in American students. Minor differences exist, however, in that Way 13 remains most disliked among American students. It is probable that the ICU students' values have been influenced by US.

Two independent factor analyses were performed based on those data obtained from '63 and '83 (ICU). The results revealed that the factorial patterns are very similar to each other. Also, factors extracted from ICU students were proved to be quite similar to the factors shown by Morris.

付録

13の「生き方」

次の頁に列記したものは、いろいろな時代に、いろいろな人達が唱えた13の代表的な「生き方」を示します。あなたがその一つ一つの「生き方」をどの程度自分の「生き方」として好むか、あるいは嫌うかを、下の解答指示に従って表示して下さい。

好き嫌いの判断をするにあたっては、あなたの現在の「生き方」がどうあるとか、社会の「生き方」としてはどうあるべきかということではなく、ごく単純に、もし自分でどの「生き方」でも選ぶことができたとしたらどれを選ぶか、ということに基づいて下さい。

解 答 指 示

- (1) 先ず、この頁を切り離し、一番下の欄にIDNoを書き入れて下さい。
- (2) 次に13の「生き方」を一つづつ読みながら、その好ましさの程度を7段階尺度の中から一つ選んで、その数字を回答欄に記入して下さい。
- (3) 次に13の「生き方」全部を比べ、好ましさの順序（1位から13位まで）を数字で記入して下さい。上の(2)で大きな数字を付けた「生き方」には、今度は小さな数字が付けられる点に注意して下さい。

好ましさの程度の尺度

回 答 欄

7. 絶対に好ましい
 6. 大変好ましい
 5. やや好ましい
 4. どちらでもない
 3. やや好ましくない
 2. 大変好ましくない
 1. 絶対に好ましくない

生 き 方	好ましさの程度	順 位
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
IDNo		

13の「生き方」

第1の「生き方」

自分の住む社会の諸活動に積極的に参加するが、社会改革のために参加するというのではなく、むしろ人間が作り上げた社会とその文化を理解し、尊重し、保存しようと努める生活態度。過度の欲望を満足させることは避け、節度を保つ。人間生活にとって良いものを獲得しようと望むことがあっても、そのために秩序を破壊することのないよう穏当な態度で行動する。人生で大切なのは中庸、優雅、節制である。生活の卑俗化、物事に対する狂信、不合理な行動、短気、耽ごとは避け、友情は尊ぶが八方美人的な親密さはつつしむという態度でなくてはならぬ。人生は規律をもち、理知に富み、洗練されたものでなくてはならない。社会の変革には長年月をかけ、人類文化の成果がそこなわれぬよう慎重にくわだてるべきである。個人個人は肉体的にも社会的にも活潑に活動すべきであるが、それは自制と理性に基いた、秩序ある活動であるべきであって、決して極端に走ってはならない。

第2の「生き方」

人間は、自分の私生活を重んじ、自分のための時間を取り、生活の自制に努めて、おのれの道を歩むべきである。自足と反省、瞑想とおのれ自身を知ること重点をおき、社会の団体活動に深入りしたり、自然環境を制御することに心を寄せたりすることは避けるべきである。また人間は、外面的生活の単純化に努め、自分の外部にある、物質的もしくは社会的な力によってのみ満たされるような欲望をつつしむべきであり、おのれ自身の道を定めることによって、独自の洗練された生活をおくるとを人生の目的とすべきである。外的生活から得られるものはまことに少ない。だから、人間は他者依存と唯物的生活を避けて、生活の中心をおのれ自身のうちに見出さねばならない。

第3の「生き方」

この生き方は、他の人々に対して同情ある態度をもって接することを中心とする道である。自己の虚栄とか打算とかを越えた隣人愛こそが、人生の最大要件でなければならない。物欲、情欲、支配欲、異常な知識欲、自己中心主義におぼれてはならぬ。このような人間欲は、人生を意義あらしめているただ一つの隣人愛を妨げるからである。あまりにも精力的な人は、真の意味での自己発達に必要な他人からの人格的影響に対して、自分の心を閉ざしているに等しい。我々は自己の生活を清め、自己主張をすると同時に、他人を受け入れ、他人を尊重し、他人を助けるのでなくてはならぬ。

第4の「生き方」

人生とは、感覚的に気のむくまゝ楽しむべきものである。人生の目的は、社会を変革したり、他人の生活に立ち入ってそれを拘束したりすることにあるのではなく、おのれの心を開き、他人を受け入れることの中に喜びを見出すことにある。人生は、労働とか道徳的訓練の場である以上に、楽しみのものである。労働したり、善を行ったりすることよりも、各自が意のむくまゝ、物事に動かされるまゝ、生活することが大切である。しかし、このような生活を楽しむためには、周囲に何が起っているかをすどく把握し、新しい出来事に対しても自由に態度を決められる程度に、自己中心的な考え方をもつことが必要である。他人とのかゝり合いを避け、特定の人や物事にあまり頼らず、自分をあまり犠牲にしないで、沈思黙考の時間をもつことが大切である。孤独と社交性は、両方とも、よき生活にとって必要なのである。

第5の「生き方」

人は、自分に固執し、他の人々から離れて、自己中心の生活をしてはならぬ。むしろ、社会の中へ飛び込んで、人々との協力や友情を楽しみ、共通の目的を実現するために、他の人々と一緒に確固たる行動をとるべきである。本来、人間は、社会的であり、積極的なものである。活潑な団体活動に日々

参加し、協力することの喜びを感じるのでなくてはならない。瞑想、禁欲、自己充足のための心づかい、抽象的な知性、孤独、過度の所有欲などは、すべて、人々を結びつけるきずなを断ち切ってしまう。人は、元気一杯、外へ向って生きるべきであり、生活のよきものを楽しみ、他人と共に働いて、明るい生命にみちた社会生活を営めるよう、心がけなくてはならない。このような理想に反対する者をそのまま社会に放っておくわけにはいかない。生活とは、そう各自気まゝにできるようなものではないのである。

第6の「生き方」

人生には、いつも、沈滞したり、だらけたり、じめじめしたりする傾向がある。こうした傾向に逆らって、人は、常に、活動することの必要性を強調しなくてはならない。肉体労働にも従事し、冒険も敢て行い、具体的な問題の現実的な解決と、社会を制御する技術の改良に努めなくてはならない。

人間の将来は、もっぱら、我々が現在何をするかということにかゝっているのであって、何を感じ、何を思案しているかということが重要なのではない。人間生活の諸問題は常に存在し、将来もまた絶えることなく生じてくる。だから、人間が進歩するものなら、常に改良がなされていなくてはならないのであって、過去に盲従したり、将来を夢みるだけではいけない。常時断乎とした態度をもって働くことによってのみ、我々の前途をおびやかす力に打ち勝つことができるのであり、科学的知識によって可能となった技術の進歩に依存することによってのみ、現在及び未来の生活問題が解決される。こうした問題解決の中に人生の目標がある。現状満足は、更によき生活実現の道をはばむものである。

第7の「生き方」

人間の生活には、様々に異った生き方があるが、我々は、異った生き方をいろいろな場合に応じて、受け入れるようにすべきであって、それらのうちどれか一つを唯一の生き方だと決め込んではいない。ある時には一つの生

き方が適切であっても、他の時には別の生き方の方がもっと適切であることがある。生活には、楽しみ、活潑な行動、静かな思索といったものが、それぞれ同じ程度に必要であって、どれか一つを極端に行えば、我々の人生にとって重要な他のものを失うことになる。それ故、我々は、融通性を養い、自己の多様性を認め、この多様性から生ずる緊張をあるがまゝに受けいれて、享楽と実際行動の中にも自己を失わぬようにすべきである。人生の目標は、楽しみと、実際行動と、思索とのダイナミックな統合に見出されるのであり、従って、いろいろな生き方の統合に見出されるのである。我々は、これらすべての生き方を用いて生活を築くべきであって、一つの生き方だけに頼るべきではない。

第8の「生き方」

楽しむことが生活の中心である。しかし、それは、狂熱的な快楽を追求するといったことではなく、素朴な喜びを求める生活の楽しみである。たとえば、生存そのものの喜び、風味ある食物、気持のよい環境、友人との親しい会話、休養時ののびのびした気分といったものを味う喜びのことである。暖かな住みよい家、清潔でさっぱりとした座敷、十分な食物が貯えられている台所、友人を暖かく迎えらるる雰囲気の中で、これらを与えてくれた世界に感謝しながら、ゆっくりと安住することのできる生活が我々の理想である。燃えるような野心とか、狂気じみた禁欲的な理想追求とかは、単純で物事にこだわらぬ、健全な生活を送る能力を喪失してしまった、生活不満者の症状である。

第9の「生き方」

物事があるがまゝに受けいれることが生活の中心ではなくてはならぬ。生活にとってよきものは、自ら求めずしてやって来るのであり、果敢に行動することや感覚的欲望にふけることによって、もたらされない。同様に、社会生活の渦に巻き込まれたり、人助けをしようとしたり、独り真剣に思索し

たりすることによっても、得られるものではない。人間の幸福は、むしろ、自分自身の障害がとり除かれたとき、求めずしてやって来るのである。求めることを止め、静かな受けいれの態度をもって待つとき、人間は、自己を養い自己を通して働く力に対して心を開き、これらの力に支えられて喜びと平安を味わうことができる。木蔭にひとりたゞずみ、自然の声に耳を傾け、静寂の中に受身の態度をもって人生に対するとき、外からの悟りが心の中へ入って来るのである。

第10の「生き方」

自己統制こそが生活の中心でなければならない。それは、世の中から逃避するような容易な自己統制ではなく、思慮深くきびしい自己統制の生活であって、強大なこの世の力の限界をもわきまえた生き方である。良き生活とは、高い理想をはっきりかゝげ、それへ向って理性的に進むものである。安楽と欲望の誘い声にそゝのかされることもなく、単なるユートピア社会を夢みることもなく、最後の勝利といったかけ声にもまどわされず、過度の期待を抱かずして、人間は、思慮ある生活の規律を守ることができる。自己のたゞなを握りしめて、制御しがたい衝動を抑え、自分をわきまえ、理性をもって行動し、自立の精神を全うするのが、この生き方である。かくして、最後にその身は滅ぼうとも、人間は、人間としての威厳を失わず、大往生をとげることができるのである。

第11の「生き方」

瞑想の生活こそ良き生活である。外部の世界は、人間のすみかとしては不適當なものである。それは、あまりにも大きく、冷たく、せゝこましい。心の内部へ向けられた生活こそ、みのり豊かな生活である。豊かな内面生活の理想や、感受性や、夢や自己認識に、人間の真のすみかがある。

自己の心を見がき練って、はじめて、人間は人間となる。そこに生きとし生けるものすべてに対する同情と、生きることの苦しみに対する理解が生れ、

攻撃的な行動のつまらなさが認識されて、瞑想の喜びが得られるのである。うぬぼれは消え、窮乏の生活は無くなる。世をすてることによって、人間は、内的生活の更に大きく美しい大洋を見出すのである。

第12の「生き方」

身体のエネルギーを使うことは、張り合いのある生活のもとである。建築のための材木とか石とか、刈り入れるべき農作物とか、型をつくる粘土とか、ともかく、手足は何か作り出すための材料を要求し、筋肉は、登ったり、走ったり、滑ったりする行動を楽しんではじめて、生き生きとしてくる。人生に生き甲斐が見出されるのは、何か障害を克服し、支配し、征服するときである。積極的で、現実的で大胆な冒険的行為のみが、満足すべきものであって、石橋を叩く慎重さとか、のんびりした安易な生活に頼っては、真の人間生活を全うすることができない。外向的で精力的な行動、今こゝにある現実の力に歓喜することこそ、人間の本当の生き方である。

第13の「生き方」

他人のため世界のために献身することが、人生の第一義である。それは、他人の成長発展のために献身し、静かに力強く全うされる宇宙の偉大な普遍目的のために、おのれを捧げることである。他人とこの世界の目的とは、その真の姿において、我々が信頼することのできるものだからである。人間は、謙虚、誠実でなくてはならない。強情を張ってはならぬ。我々の必要とする他人からの愛情と保護を感謝することはあっても、それらを他人に強要することなく、人と自然に親しみ、自分自身の安定をうる。献身することによって、自分の心の中に良きものを培うことができるのであり、献身を通して得られた良きものによって、自分自身が支えられていくのである。人間は、物事に動ぜぬ自信をもった高貴な器として、完成さるべき偉大な宇宙目的のため献身すべきである。